

針葉樹会報

1980.10

復刊第57号



表紙写真　尾白川本谷　奥の滑滝沢

山に行くと言えば巨大で無骨なカメラを持つて行かなくては気がすまなくなってきた。交換レンズや三脚を入れると十二キロになる。これに生活用具を加えればすぐに三十キロだ。ところがこの重量に耐え得る訓練をしているかといえばサッパリ。揚句、ひたすら苦しみ、その余り判断力も無くなり、ロクな写真も撮れない、というアブハチトラズを繰り返している。それでも快心の一枚を期待してしつこく持つて行く。素直に登つていればいいのに妙な趣向にとりつかれてしまった。先日の撮影行に奇得な同行者を得た。尾白川本谷奥の滑滝沢中段の滝下で水を飲む加藤君である。しかし、機材の重量が災いしてこの滝の直登はかなわず、以後稜線を目がけて三時間にわたる垂直の藪こぎを強いられることとなつた。

(写真と文・金子晴彦)

発行日 1980年10月31日	針葉樹会報	編集人 東京都大田区東矢口 3-21-6 富士荘
発行所 針葉樹会		加藤博行
印刷所 大栄印刷	復刊第57号	

目次

八 会員各位

左記要領にて故・鈴木英雄氏及び故・中川孫一氏の追悼会を取り行なう予定です。

編集人
東京都大田区東矢口
3-21-6 富士荘

加藤博行

鈴木英雄さんの急逝を悼む	久保孝一郎
セント・ヘランズ火山の爆発	吉沢 一郎
双六谷を遡る	佐藤 活朗
尾白川本谷から甲斐駒ヶ岳	
フリークライミングって本当にむつかしいですね	加藤 博行
☆海外の便りから	引地 真
中村 保	
クマさんの新著『山へ』	
—東京商大山学部OB— 柿原謙一	
望月達夫著『折々の山』を読んで	石井左右平
一橋山岳部現役紹介	
会務報告	岩崎 利一
会員消息	佐藤 活朗
会計報告	近藤 泰
編集後記	

一、故・鈴木英雄氏追悼会
日時 昭和五六年一月三一日（土）夕
場所 甲府盆地の温泉宿か民宿の予定
翌日山行または博物館・絵画館等歴訪
二、故・中川孫一氏追悼会

日時 昭和五六年三月七日（土）夕
場所 丹沢又は道志の山の宿予定
翌日周辺の山を歩く

詳細については、久保孝一郎さんが世話人及び事務取扱いをされますので、参加御希望の方はそれぞれ一ヶ月前位までに久保さん宛お知らせ願います。

(連絡先 渋谷区宇田川町三三一-一三
TEL 四六一一四七六〇)

- 1 -

鈴木英雄さんの急逝 を悼む

久保孝一郎

二月連休の日本山岳会主催山スキー講習会から夜間帰宅したら、家内から「鈴木さんが急におなくなりになつた」という電話があつたと聞かされ、翌朝同期の増山さんに電話をいれ、「交通事故でほぼ即死の状況、葬儀もすでに終つた」と知らされ、全く茫然とした。

ここ数年鈴木さんと山行を共にする機会が多く、最近では山だけでなく町においても、色いろとお世話になつたりなられたりの交際をお願いしてただけに、私は深い悲しみにおそわれた。

中川（孫）さんの事故以来、なるべく単独行はさけるように心がけ、東京付近の日帰りや一泊の山行に鈴木さんによく同行のお誘いの電話をかけると、鈴木さんは必ず欣然快諾された。たぶん鈴木さんのあの温和な御性格が私とウマがあつたと思われ、山行にはよく悲しい哉！

御一緒した。そして鈴木さんと私の二人だけではなく、時には宮城さんにも加わって頂いたり、また私の家内をお仲間に入れさせて頂いたこともある。

（編者注）上記原稿は会報56号〆切後頂戴しましたので、本号に掲載しました。

こころみに昨年の同行山名をあげると、二月に道志・ガンドウ峠周辺（神野より途中路不明のため引き返す）、三月に大野山・孫さん追悼登山、六月に笛尾根の西原峠・笛吹峠より五日市、七月に富士山吉田口三合目等で

セント・ヘランズ

火山の爆発

吉沢一郎

想い出深い山行は、数年前の八月、日光湯元に一泊、前白根山より白根山に登つて丸沼方面へ下つた時や、五月、私がマイカー運転、大爆発の記事が少し出ていた。AとYは一步多摩川を遡り柳沢峠を経て、笛吹川の民宿に泊まり、大岳山（ダイタケサン）社務所より黒金山の手前の牛首まで往復した時のことどもである。

その後その記事に注意していると、Yが20、月一九日付朝刊に、セント・ヘランズ火山の26、6／3と合計で四回、Mが19、23、26と三回、Aは19、26の二回と6／13付のAグラフで大きな表紙写真を含めて数枚のカラーを入れたものをしていて、26日に三紙とも出しているのは現地25日に第二回の大爆発が起つたからである。大爆発は6／12にも起つて

いるが、これは7／10付の週刊Gに出ていて

だけであった。この記事は可なり悉しく書いてあるが、関係機関の責任者からの取材を幾つも入れているのはよい。

ところでこの山名であるが、ウェブスターの地名事典によると、セント・ヘレンズではなくセント・ヘランズとなつてるので、山名を正しく発音している新聞は一つもなかつたことになる。

山の高度に至つては最後まで皆違つていた。尤も今度の爆発で噴きとばされた五〇〇メートルのことは一応措くとする。

アメリカのタイムズ・アトラスと先の事典によれば、アメリカで使われている高度は九

六七七呎（二九四九・五メートル）だから約二九五〇メートルが正しい。しかるに A もそのグラフも二九〇三メートルを押し通し（Y も同じ）、M は三二〇〇メートルをずっと使つていた。唯週刊 G だけは、二九七五メートルという数字を出しているが、それでも二五メートル高い。一体これらの数字の根拠はどこにあるのであろうか。

それにわれわれ山男としては、比較的近くにあるレイニア山（四三九二メートル、北東九〇キロ）

）、アダムズ山（三七五一メートル、東方六〇キロ）、フッド山（三四一七メートル或は三四一四メートル、地上一五、〇〇〇メートルの高度に達し、それが偏南東一〇〇キロ）等に対する影響（氷河に被

われた山が真黒になつてしまつたとか）については何も言及されていないのが不満である。週刊 G に出でいたが、太陽と月と地球がこれで何も言及されていないのが不満である。南東一〇〇キロ）等に対する影響（氷河に被西風のために東に流れ、今や地球の上空を一周してアメリカの空に帰つてきている。

わられた山が真黒になつてしまつたとか）については何も言及されていないのが不満である。週刊 G に出でいたが、太陽と月と地球がこれで何も言及されていないのが不満である。南東一〇〇キロ）等に対する影響（氷河に被西風のために東に流れ、今や地球の上空を一周してアメリカの空に帰つてきている。

わられた山が真黒になつてしまつたとか）については何も言及されていないのが不満である。週刊 G に出でいたが、太陽と月と地球がこれで何も言及されていないのが不満である。南東一〇〇キロ）等に対する影響（氷河に被西風のために東に流れ、今や地球の上空を一周してアメリカの空に帰つてきている。

火山は、カリフォルニア北部のラッセン山（それから M 新聞に「コランビア河は（日本

カスケード山脈の最南端）となつてゐるが、今度のセント・ヘランズの爆発で活火山は二つになつたのかも知れない。

ラッセン山は一〇〇年振りに一九一四一一六年また爆発したのだそうだが、私にはその後も噴火しているような記憶がある。セント

・ヘランズで噴出した軽石層の分析から、こ[・]こでは三五〇〇年前と四五〇〇年前は噴火して[・]いたことがわかつたらしいが、最近では一八五八年が記録されているので、今次の爆発は一二三年振りとなる。

因みにセント・ヘランズ山の位置は、タイムズ・アトラスによれば $46^{\circ}12'N, 122^{\circ}11'W$ 北米大陸では有史以来最大の大噴火となつた今度の爆発の総エネルギーは、広島原爆の

双六谷を遡る

佐藤活朗

いつになく涼しかった今年の夏、その最も夏らしかった時をとらえて加藤（博）、兵藤両氏と出かけた。

八月八日（金）

神岡駅からタクシーにて金木戸川に入る。一〇時一五分、一般車終点より歩きだす。ときおり陽がさすまずまずの天気。

一二時三〇分「広河原」着。林道がつき、右岸の細い道をたどる。左岸に笠ヶ岳から流入する小倉谷が合するのを見るとやがて沢床に降りる。ここでわらじをつける。谷は坦々として悪そうには見えなかつたが、歩きだすとすぐ行きづまつてしまい、かなり深い渡渉、大きな高まきを繰り返す。

三回目の高まきから河原に下りたつたところにわざかな砂地を見つけて新調のテントを張る。五時。楽しい沢歩きの途中の仮泊。流木を集めてたき火をし、ワインやウイスキー

を飲む。

八月九日（土）

六時一〇分出発。ややあつて左岸から打込谷の大きな流れが注いでいる。いきなり渡渉を強いられる。陽のあたらない朝の谷の水は冷たく、渡りおえた後もふるえながら歩く。やがて渡渉にも慣れ、かなりの流速のところでもかまわず入つてゆく。なかには転倒した人もいたようだが。たしかにへそのあたりまで水が来ると体が浮いてしまい、渡るのは無理だ。

大きな滝はほとんどない。沢すじにごろごろしている大きな岩を乗りこえるのに手間どる。木をたてかけて足場としたり、ショルダーで越したり緊張感には欠けるものの、これも沢登りの楽しみのひとつだ。そんな岩のひとつを越えるときに滑り落ちた一幕もあつたが、一時三〇分双六谷との分岐点に到着。我々はここから左の蓮華谷、次いでその支流である九郎衛門谷を遡るわけである。本日はそろそく、二人は下の道へ、しかしどちらも同れた。途中稜線通しに双六岳へ登る兵藤さんと別れ、二人は下の道へ、しかしどちらも同時に下り口で合流、二時三〇分双六池に着いた。いならぶ多数のテントを眺めやるに我々

快晴に明ける。夏山の朝のわくわくするような気分は学生時代の合宿の一日と変わらない。そして同行の仲間も多少社会にもまれてはいるものの学生時代と同じである。だがこの甘い幻想は、きょうの出だしの大高まきで破られた。九郎右衛門谷出合の大滝を避けて右側の草付の壁を登るのだが、この壁が下を見るのが怖い位急なのである。おそらくぼくはへっぴり腰になつていただろう。

はすでに年長者組であり、人のほとんどいない谷を遡つてきた身には、この場のまるで都会のようなふんい気には異和感がおさえられなかつた。

八月一日（月）

双六谷を抜けたことで満足した気分となり、槍の肩を越えて上高地経由故郷松本をめざす兵藤さんと別れ、これも故郷高田へ帰る加藤さんと新穂高温泉に下る。池から四時間足らずで温泉に着いた。一方、兵藤さんはその日一二時間の歩行の末、五時に上高地に着くと

いう学生並みのがんばりを示し、多少重量を増したものまだまだ健在であることを証明した。

だつた。（佐藤君の寄稿参照）以来再び沢登りに興じたくてうずうずしていた処、金子氏から電話があつて甲斐駒へ行かないかと言う。本谷沿いの道を辿る。連休の夥しい入山客はならば尾白川本谷から登りましょうと、即座に話がまとまつた。たまたま前日（九月三日）の毎日新聞社会面のシリーズ『十年前』の欄に、故橋本明さんが亡くなられた赤石沢中央壁の当時の遭難記事が回想されていた。金子氏にとつて三年振りの甲斐駒らしい。僕にとっては二年前、前神さんと遡つた黄蓮谷以来である。

九月十三日、竹宇駒ヶ岳神社発（六・一〇）不動滝（七・三〇）噴水滝（十三・十五）黄蓮谷出合（十四・三〇）

駒ヶ岳神社脇の吊り橋を渡つて少し登つた頃、金子氏が突然「今年の山は冷たいなあ」と言い出した。地下足袋で歩いているせいだろうと思つたが、そうではないらしい。この時期には何度も橋本さんの供養に来ている彼には、例年と違つて今年は殊更冷たく感じるらしい。やはり平年より五度近くも低い原始性を久し振りに満喫した味わい深いもの

が冷えているとは面白い。

出発後三十分程で黒戸尾根と別れて尾白川勢湾台風で破壊されその後修復されていないが、結構歩き易く沢の捲道と思えば立派なものである。水しぶきで虹のかかる不動滝で一休みした後再び右岸を絡むようにして進む。双六谷の胸までの渡渉で度胸をつけた僕としては、もう沢に降りたくてうずうずしている。道がやがて不鮮明になり漸く沢に降り立つた時は、藪から開放されてほつと息をついた。見あげれば、遙か上方には黒戸尾根天狗の刃渡りが望まる。尾根道とは既に七百メートルもの高度差がついて尾白川の深さを感じた。数日前の台風十三号のせいか水の色は少し緑を帯びてあまり気持ちよくはない。それでも噴水滝周辺では丁度太陽が顔をのぞかせたこともあつて、二段の滑滝から豊富な水流をひと筋に集めて噴水を吹き上げる様は圧巻であつた。

八月半ば兵藤・佐藤君と三日かけて遡行した双六谷九郎衛門沢の印象は、北アルプスの原始性を久し振りに満喫した味わい深いもの

加藤博行

尾白川本谷から甲斐駒へ

金子氏はそれまでも何度か手際よく三脚を立てて自慢の大型カメラを据えてはパチパチやつていたが、この滝に至つては水流脇のあちこちに三脚を移動しての撮影で、地下足袋のうしろ姿はトランシットを覗く測量技士のそれである。その後ザックの吊り上げとショルダーを一回ずつして、程なく黄蓮谷との出合に辿りついた。連日の不摂生と睡眠不足で焚火をやる元気もない。二人共水割り三杯程度コロリと寝てしまう。

へは進まない。本谷の入口からこの様子では隣りの黄蓮谷より良さそうだと、軽やかに水流を渡つていくと、やがてうんざりする河原歩きをさせられる。どうも中だるみでこの辺が黄蓮谷程、人を迎えない理由なのだろう。しばらく行くと崩壊してまだ間もないと思われる様な巨岩が、ゴロゴロ狭い谷を埋めており、薄気味悪い個所が続く。相当な荒れ方である。

あと一ピッチ位で稜線かと思われる頃、十五メートルの滝がほとんど垂直に立ちはだか
った。左岸は絶壁で登攀不可能、かと言つて
右岸は沢へは再び戻れそうにない急峻な樹林
帯である。滝の直登は岩にリスが全くなくボ
ルトでもないとちょっと登れそうになつる
つるの花崗岩。記録では『中程にある十五メ
ートル垂直の滝を除けば問題はない』とあつ
たが、どうやら我々には大問題だ。「こ
れはちょっと無理っぽいですねえ」とぼくが
言えば「どうも闘争心がわかねえなあ」と金
子氏も全く登る気がなさそう。ここに至つて
おおらかな沢歩きも遂に諦めて、右岸の樹林
帯につつ込み藪こぎして稜線に出ることにし
た。もう稜線も間もないだろうと思つたのだ
が、ここからちょっとした悲劇が始まる。

九月十四日、出合発（六・五〇）奥の滑滝
沢出合（九・三〇）十五メートル滝直下（
十一・十五）稜線（十四・十五）甲斐駒頂
上（十五・十五）七合テン場（十七・三〇）
久し振りに十二時間も寝て目がくつきそ
うである。今日は雲ひとつない快晴、喻々本
谷核心部である。いきなり七メートルの滝を
登ると美しい滑が続いている。白い花崗岩の
川床を水が滑るように流れしていく。やがて坊
主の奇怪な姿が沢の前方にによつきり現われ
て、見事な景観に思わず二人共歎声をあげる。
金子氏の撮影もいよいよ全開で、さっぱり先
枝沢を入れると、二時間半で奥の滑滝沢出合
に到着。正面本谷には三十メートルの急峻な
滝が細く見事に流れている。興味をそそられ
たが予定通り枝沢に登路をとつた。少しでも
尾根の高みに抜けて尾根歩きを減らしたい為
である。奥の滑滝沢は出合よりかなり上部ま
で、つるつるのスラブでとても直登できそう
にない。甲斐駒特有の花崗岩の一枚岩で、多
少騙しちゃ登るにしても一区切れまでとても
緊張感が続きそうもない。落ちたら本谷の底

が、ここからちょっとした悲劇が始まる。暫くはトレースを拾いながら何とか進めたが、やがて厚い急峻な這松帯に出くわす。もう強引にぶらさがつて落ちないように行くしかない。兎に角誤魔化しようがなく二人で猿になつて登る。残暑の太陽にじりじり照らされて喉はからからである。タイミングを逸し

て水筒に水を入れ忘れたことを激しく後悔した。ザックの中でちやほんと鳴っているのは、水筒に詰めたウイスキーと橋本さんに捧げるブランデー一本、そして金子氏はと言えば一罐のビール。全くひどい話である。両腕を傷だらけにし、這松の花粉をいやという程吸つて三時間後、風のそよぐ稜線（二七五十メートル地点）に倒れ着いた。大学三年の夏合宿で、日高山脈のカムイエクウチカウシの這松こぎに次ぐ久し振りの大健闘であつた。一時間後、登山者で賑わう頂上で心臓麻痺を起こさない様にして飲んだ一罐のビールの味は夢の様であつた。

精魂つき果てて七合への下山途中、橋本さんの追悼碑の前で暫く佇み故人の冥福を祈つた。七合テント場に着いた頃はもう夕暮れせまり、テントが満開でスペースがない。やむなくブランデーを道祖神にかけ御祓して墓石の横にささやかにテントを張る。七丈小屋の高木さんの所で火にあたりながら、暫く談笑した。連休の山小屋らしい賑やかさが、夜遅くまで続いていた。

九月十四日、七合発（四・三〇）横手（七・四五）

明けて三日目、きょうも快晴である。八ヶ岳が釜無川を超えて遙か雲海上に聳えている。尋ねた。すると、九月はじめに、涸沢で、岩登りを中心とする第二次定着合宿をするといはない静かな下山である。一昨日歩いた尾白川をはるか左下に見やつて刃渡りを抜け一気に横手に向う。幸か不幸か甲斐駒の大きさと原始性をあらためて認識させられた力あふれる山行であつた。

その頃、僕は、足をケガしていたが、それが直りきるのを待ちきれずに、トレーニングを開始した。なにしろ、卒業以来、数ヶ月であつても、体がどんどんなまつていくのを痛感していたのだ。これじゃいけないと発奮して、ランニング（約九〇キロ）、山歩き（北岳、八ヶ岳）、ゲレンデ（越沢バットレス二回）を約一ヶ月間でこなした。山に行ける日を、こんなに楽しみに待つたのは久しぶりだつた。

針葉樹会の若手の人材不足は、相当深刻なようだ。今年の春、未練をタップリ残しながら、学生生活に別れを告げ、社会人になつたばかりの僕が、新しい学生担当幹事になるよう言わされたからだ。もともと肩書きの僕だから悪い気はしなかつた。僕は、喜んで、

その肩書を戴いた。こうして、学生との腐れ縁が続くことになつた。

フリー・クライミングつて 本当にむつかしいですね

引 地 真

や降りの雨だつた。この大雨も、僕はほとんど気にせずに歩きだした。いつも苦しむ涸沢への入山も、学生時代より荷が軽いせいか、かなり楽に歩くことができた。自分の体調に自信を持つた。トレーニングの成果だろうか。

△滝谷第四尾根△

雨の中を入山したかいがあつて、翌九月一日は、朝から素晴らしい天気になつた。僕たちは、滝谷をめざして北穂南稜を登つていつた。僕は、三年生の宮下克彦君とともに、四尾根を登るのだ。

僕は、三年前に一度、四尾根を登つたことがある。しかし、その時、一つの後悔を残していた。Dカンテの登攀で、アブミを使ってしまつたのだ。そこは、本来、ハーケンをホールドに使つたAOで越えるところだ。今日の僕の目標は、DカンテをAOで越えることだ。

C沢左俣を慎重に下降して、四尾根のスノーコルに着いた。ここが取付だ。何といふこともなくAカンテを登り、両側がツルツルのBカンテ、快適なCカンテ、もろいガリー

から凹角を抜けてツルムの肩へ。そしてツルムのコルへアプザイレン。前に一度登つたところなので、特に困難とは感じない。調子はかなり楽に歩くことができた。自分の体調に自信を持つた。トレーニングの成果だろうか。△滝谷第四尾根△

コルから一ピッチ登つて、いよいよ問題のDカンテだ。かぶり気味のカンテで、左手にはしつかりしたホールドがある。しかし、右手のホールドがない（と思った）。そこで、

ハーケンにカラビナをかけ、それを右手でつかむ。細いクラックに足をつっこみ、体をも

ちあげる。右手のカラビナをはなし、カンテの上のフレークをつかむ。あとは容易に抜けられる。AOでもそれほど困難とは思わなかつた。前回、どうしてアブミなんか使つたのだろうか、と不思議に思うほどだつた。

あっけなく目標は達成された。しかし、この目標は低すぎたことが、後にわかつた。最初の目標は、松高ルートの最初の三ピッチは、草付や浮石の多い、容易だが不愉快なところだ。四ピ

ッチめからが、このルートの核心部で、このルートを魅力的にしている部分だ。まず、松高ハングの下を右へトラバース。そして松高ハングを越えるのだ。ハングの下に達すると、目の前に残置シリリングがあつた。ルート図

の指示どおり、ためらわずにそれを右手でつかんで体をもちあげる。その上にはしつかりしたホールドがある。腕力を使うところなのも新しいグレード（柏瀬祐之他編『日本登山大系七、槍ヶ岳・穂高岳』白水社）によると、Dカンテは、V級のフリー・クライミングとな動作でハングを越える。軽くて、フリクションのきくクライミング・シューが威力を発揮してくれる。それに続く凹角にはいると、

後悔を残してしまつた。次回は、フリー・クライミングに挑戦しなければならない。

△四峰正面壁松高ルート△

翌日、僕は、五、六のコルを越え、残雪

が消えて不安定なガレ場となつた奥又白本谷をたどつた。パートナーは、三年生の田中賢介君。天気は晴れで、目標とする四峰正面壁が輝いている。

充分な高度感に胸が高まる。岩も、下部とは違い、堅く、岩を攀ることに熱中できる。そこを抜けると松高テラスに着いた。

テラスからAOの垂壁にとりつく。そこはがつちりしたホールドがあり、腕力をたよりに、フリーで登ることができた。フリー化の達成と、叫びたいところだが、ここをフリーで登つた人は、おそらく、大ぜいいるだろう。実際、僕のすぐ後、四年生の小林修君も、これをフリーで登つている。僕の感じでは、このグレードは、せいぜいIV級上程度だろう。

しかし、ルート図のAOをフリーで越えたことにより、僕の気分は上々だ。最後のピッチを快適に登り、登攀終了点に到着した。

△四峰正面壁北条・新村ルート▽

三日は、北穂まで行つたが、濃いガスと冷たい強風のため、どこも登攀せずに涸沢に引き返した。四日も、朝から前日と同じような曇り空だった。そこで、滝谷よりも天気がいいだろうと思われる奥又白側に行くことにした。

奥又白谷は、濃いガスにおおわれていたが、滝谷のような強風が吹いていないのが幸いだつた。僕は、一昨日と同じ道歩いていった。今日は、パートナーは、現役のチーフ・リーダ

一小林修君で、めざすは北条・新村ルートだつた。

取付から最初の三ピッチは、容易なガリ

で、そこを快調に登り、ハイマツテラスに着いた。ここから、このルートの核心部の青白

ハングだ。去年、RCCⅡによつてフリー化され、VI級にランクされたピッチだ（『岩と雪』七一、七四号）。まず、僕がトップで取

りついた。青白ハングは二段になつていて、まずはじめの小ハング（V級下）に挑んだ。

右手はハングの縁をしつかりとつかめたが、

左手のホールドに自信が持てない。ついに、

目の前で花ざかりの残置ハーケンの誘惑に負

けてしまつた。左手で、ランニングにしたカ

ラビナをつかんで、やつとの思いで小ハング

上のレッジに立つた。それだけで僕の腕は相

当疲れてしまつた。そこから頭上の大ハング

（VI級）を見た時、急速に自信がなくなつた。

しかし、下界に戻ると、いつものように、

を弱気にさせた。結局、アブミのかけかえで

（VI級）を見た時、急速に自信がなくなつた。

しかし、下界に戻ると、いつものように、

を弱気にさせた。結局、アブミのかけかえで

（VI級）を見た時、急速に自信がなくなつた。

しかし、下界に戻ると、いつものように、

負けない強い精神力とが必要だと感じた。この時の僕には、そのどれもが欠けていたようだ。

小林君も、このハングで大いに苦労した。

結局、彼もギップ・アップした。

VI級のすごさを知つた僕たちは、尻尾をま

いて戻るしかなかつた。アブザイレンで甲南

バンドまで降りて、来た道を引き返した。

「もつとトレーニングして、もういつへん出

直さんとあかんみたいやな」と、入山時の元

気さを忘れて、僕はトボトボと涸沢に戻つた。

翌五日、気圧の谷の接近により、天気は崩

れてきた。僕はそれを理由に下山を決めた。

僕は自分の力のなさを思い知らされた。「も

う一度、自分を鍛えあげて、出直さなければ

ならない。そのためには、ハードなトレーニ

ングだ」と、徳本峰を越えながら、僕は考え

をめぐらせていた。

しかし、下界に戻ると、いつものように、

もう一人の僕が言うのだ。

「そんなにきばらんでも、ええんとちやうか。」

ここでハードなフリー・クライミングをす

氣楽にやつたらええやんか。」

「米国生活八年半」

会報三六号拝受。海外の者に気を使って頂いて恐縮です。中島さんや久保さん達戦前卒業の方々が山を楽しんで居られる有様、誠に羨しき限りで

前号五十六号を航
空便にて海外の会員

す。

『から便りから』
に送付しました処、嬉しいことに二名の方より近況報告いたしました。多少郵便料は高くつきますが、今後もできる限り航空便を使って海外の会員の皆さんに加していただこうと考えております。

かえ、小生何の因果か今度だきました。多少郵便料は高くつきますが、今後もできる限り航空便を使って海外の会員の皆さんに加していただこうと考えております。

かえ、小生何の因果か今度だきました。多少郵便料は高くつきますが、今後もできる限り航空便を使って海外の会員の皆さんに加していただこうと考えております。

かえ、小生何の因果か今度だきました。多少郵便料は高くつきますが、今後もできる限り航空便を使って海外の会員の皆さんに加していただこうと考えております。

かえ、小生何の因果か今度だきました。多少郵便料は高くつきますが、今後もできる限り航空便を使って海外の会員の皆さんに加していただこうと考えております。

石井左右平

八月二十日 サンフランシスコ市



先日、財界人で第一線を引いた方が、「青春時代を残してリタイヤし度かつた」と感想を述べていましたが、正に他人事ではなくなりつつあります。早く皆様の仲間に戻り度い、と策を練つて居ります。

山の方も四年程前にカナダ・ロッキーに遊んだ位。が矢張り一般の観光と違つて大分山の中に分け入りました。誰も居ない高みに迄

登り素晴らしい眺めを楽しみました。と云つて又一度、と云う処でもないようです。

此の前、ゴルフの会で当地に駐在して居る塩川清彦君と会いました。前には田中一雄兄

兄の国メキシコで、思いがけず針葉樹会のメンバー四人（大賀、中島、前神、中村T）が

集う機会があり、久しぶりに『T中さん』と呼ばれ、多少先輩風を吹かさせてもらい、ち

よいといい気分にさせてもらつたことが筆を

とるきつかけになりました。本来ならばメキシコの名山ポポカテペトル登頂記でも送つて、元クライマーの片鱗でもとどめたいところでですが、遠からず皆様に御面談の上、と云う事にして、近況にかえます。

どうもパツとした便りにならず情無い次第ですが、遠からず皆様に御面談の上、と云う

年も一昨年も活八年半、昨年も一昨年も判らなくなる事にして、近況にかえます。

「想い出のアンデス」

御無沙汰しております。

「米国生活八年半」

山の方も四年程前にカナダ・ロッキーに遊んだ位。が矢張り一般の観光と違つて大分山の中に分け入りました。誰も居ない高みに迄

登り素晴らしい眺めを楽しみました。と云つて又一度、と云う処でもないようです。

此の前、ゴルフの会で当地に駐在して居る塩川清彦君と会いました。前には田中一雄兄

兄の国メキシコで、思いがけず針葉樹会のメンバー四人（大賀、中島、前神、中村T）が

集う機会があり、久しぶりに『T中さん』と

呼ばれ、多少先輩風を吹かさせてもらい、ち

よいといい気分にさせてもらつたことが筆を

とるきつかけになりました。本来ならばメキシコの名山ポポカテペトル登頂記でも送つて、元クライマーの片鱗でもとどめたいところでですが、遠からず皆様に御面談の上、と云う

年も一昨年も活八年半、昨年も一昨年も判らなくなる事にして、近況にかえます。

どうもパツとした便りにならず情無い次第ですが、遠からず皆様に御面談の上、と云う

年も一昨年も活八年半、昨年も一昨年も判らなくなる事にして、近況にかえます。

瞬の空白を感じることがよくあるほど旅が仕事のような生活をしていると、幸い山に恵まれた国に趣くチャンスは結構多く、この七月には船舶の商談でエクアドルに出張の折、遊心抑へ難く、寸暇をつくつて秘かに二つの計画を立てました。一つはグアヤキル港からキトーに至る鉄道マニアにとつては垂涎のアンデス鉄道に乗ること、もう一つは首都キトーアヤキルはバナナの積出港として有名であり、野口英世が後に失意のきつかけとなつた黄熱病の研究の為にとどまつた土地でもあります。この二つの計画のうち汽車の旅行は都合によつて断念しましたが、エクアドルアンデスの方は二日間ですが車を利用して楽しむことができました。

キトー市は海拔二八〇〇米のアンデス高地街で、アンデス諸国の中では、ボゴタ、リマ、カラカス等に比べて、規模こそ小さいが、区画の整理された清潔で明かるくすがすがしい雰囲気の好感のもてる都市です。このキトーから真南に二百キロ、リオバンバに通ずるユ

ーカリの並木に縁どられた街道（パンアメリカンハイウェイ）に沿つてアンデス高原特有の素晴らしい風景が展開します。ゆるやかな緑の隆起に連なる氷の峰口、インディオの民家の白壁とレンガ色の屋根の配色、抜けるトニーに明るい碧空とアマゾン側から湧き上つてくるまばゆいばかりの積乱雲とのコントラスト、どこを切り取つて額に收めても絵にならぬアンデスの風物詩です。二十年前の感動が少しづつ甦つてきたものでした。エクアドル富士と云われる名峰コトパクシ（五八〇〇米）、"たつた一人の遠征"の資料集めをぼつぼつ廻つて、プラジル側リオネグロに通じる有名ノコ川源流を遡り、小説「緑の館」の舞台をアまで遠出をするか、或はペネズエラのオリシコ在勤最後の年末ですので、長驅パタゴニアヤキルはバナナの積出港として有名であり、野口英世が後に失意のきつかけとなつた黄熱病の研究の為にとどまつた土地でもあります。この二つの計画のうち汽車の旅行は都合によつて断念しましたが、エクアドルアンデスの方は二日間ですが車を利用して楽しむことができました。

キトー市は海拔二八〇〇米のアンデス高地指呼のうちに仰ぎみることができます。カラカス等に比べて、規模こそ小さいが、区画の整理された清潔で明かるくすがすがしい雰囲気の好感のもてる都市です。このキトー

ーカリの並木に縁どられた街道（パンアメリカンハイウェイ）に沿つてアンデス高原特有の素晴らしい風景が展開します。ゆるやかな緑の隆起に連なる氷の峰口、インディオの民家の白壁とレンガ色の屋根の配色、抜けるトニーに明るい碧空とアマゾン側から湧き上つてくるまばゆいばかりの積乱雲とのコントラスト、どこを切り取つて額に收めても絵にならぬアンデスの風物詩です。二十年前の感動が少しづつ蘇つてきたものでした。エクアドル富士と云われる名峰コトパクシ（五八〇〇米）、"たつた一人の遠征"の資料集めをぼつぼつ廻つて、プラジル側リオネグロに通じる有名ノコ川源流を遡り、小説「緑の館」の舞台をアまで遠出をするか、或はペネズエラのオリシコ在勤最後の年末ですので、長驅パタゴニアヤキルはバナナの積出港として有名であり、野口英世が後に失意のきつかけとなつた黄熱病の研究の為にとどまつた土地でもあります。この二つの計画のうち汽車の旅行は都合によつて断念しましたが、エクアドルアンデスの方は二日間ですが車を利用して楽しむことができました。

キトー市は海拔二八〇〇米のアンデス高地指呼のうちに仰ぎみることができます。カラカス等に比べて、規模こそ小さいが、区画の整理された清潔で明かるくすがすがしい雰囲気の好感のもてる都市です。このキトー

事さはありませんが、なんと云つてもアンデスの他の山域に比べてアプローチが容易なこ

とは山好きの旅行者にとって格好な立地です。南米にお出かけになる機会のある方々はキトーに足を留められることを是非すすめます。

今年のクリスマス休暇は小生にとつてメキシコ在勤最後の年末ですので、長驅パタゴニアヤキルはバナナの積出港として有名であり、野口英世が後に失意のきつかけとなつた黄熱病の研究の為にとどまつた土地でもあります。この二つの計画のうち汽車の旅行は都合によつて断念しましたが、エクアドルアンデスの方は二日間ですが車を利用して楽しむことができました。

キトー市は海拔二八〇〇米のアンデス高地指呼のうちに仰ぎみることができます。カラカス等に比べて、規模こそ小さいが、区画の整理された清潔で明かるくすがすがしい雰囲気の好感のもてる都市です。このキトー

事さはありませんが、なんと云つてもアンデスの他の山域に比べてアプローチが容易なこ

とは山好きの旅行者にとって格好な立地です。南米にお出かけになる機会のある方々はキトーに足を留められることを是非すすめます。

今年のクリスマス休暇は小生にとつてメキシコ在勤最後の年末ですので、長驅パタゴニアヤキルはバナナの積出港として有名であり、野口英世が後に失意のきつかけとなつた黄熱病の研究の為にとどまつた土地でもあります。この二つの計画のうち汽車の旅行は都合によつて断念しましたが、エクアドルアンデスの方は二日間ですが車を利用して楽しむことができました。

キトー市は海拔二八〇〇米のアンデス高地指呼のうちに仰ぎみることができます。カラカス等に比べて、規模こそ小さいが、区画の整理された清潔で明かるくすがすがしい雰囲気の好感のもてる都市です。このキトー

事さはありませんが、なんと云つてもアンデスの他の山域に比べてアプローチが容易なこ

新著紹介

吉沢一郎著『山へ』文芸春秋刊
望月達夫著『折々の山』茗溪堂刊

七・八月とほぼ時期を同じくして、吉沢さん、望月さん両先輩より新著が出版されました。会としても誠に喜ばしいことと思います。早速、柿原謙一さんと岩崎利一さんに紹介をお願いしましたのでここに掲載いたします。

クマさんの新著『山へ』

東京商大山学部OB

柿原謙一

吉沢先輩から近刊『山へ』を贈られた。これはクマさんの自伝的回想録で、長い年月の山行のうち一番印象深かつたK2行と76歳の笠ヶ岳行が、巻頭と巻尾を占め、その間に悪童時代につづく数多い山旅の追憶記がある。

親しかつた村尾さんは、Mの名でたびたび登場する。懐かしい。村尾さんは本当に山ず

書評は達識岳人の筆によるべきで、私に書けることは、良き時代の一橋山岳部と針葉樹会の良き回想にふけりえた、その読後感であろう。書評はその任でない。

大正十三年の正月、雲取山秩父側で道を失い野宿される。その夜の一句「オリオンの梢にかかる寒さかな」は、前々から名句だと思つていて、(P95)、うならせられた。

クマさんの妹さん二人を、昭和十年の夏に山岳部現役五人で槍ヶ岳の△まで押しあげた。ところで「この二人がどうして、商大山岳部の合宿で世話になつたのか、その経緯については全然覚えていない」(P81)には驚いた。

御冗談でしよう。合宿に発つまえ、「妹二人

がゆくから槍へ登つてくれ。僕は団衛谷を降つて高瀬川経由で殺生小舎へゆく。そこで妹たちに合流したい」とたのんだのが、クマさんです。今は亡き森川君など、きっと苦笑していますぞ。

きだつた。石油関係の会社に入社し、しばらくして常務に推されたという。「しかし山へ行かれなくなるのでという理由でそれを断わつて」(P120)とある。酒仙山仙の村尾さんの真骨頂を私ははじめて知つた。針葉樹会でも筆頭の好山谷居士の面目おどるごとし。

吉沢さんは自己の山登りの態度を、「私の登山は……要するに山旅の範囲を出ていない。極限に挑むなど……やつたことがない。……極限に挑みたい人は挑めばいい。私はそれを咎める積りも資格もない。人は自分の好きなように登ればいい」(P158)と述べられる。同感いたしました。

クマさんは卒業式を欠席した。「われわれの山に登り、卒業式にも出られずに、一橋における最後の山旅」を終つて(P118)、社会にでた。けだし圧巻であろう。M氏も同罪。

望月達夫著『折々の山』

を読んで

岩崎利一

望月さんがまた山の紀行をまとめて刊行された。

私は前著の『遠い山近い山』に教えられて、御荷鉢山やその附近の峠を歩いたものだが、今度の『折々の山』にも無数に素晴らしい山行のコースが含まれて居る。本書を繙いて感じたことを記してみよう。

先づ第一に感心するのは、何とよく素晴らしい山行を多年にわたり続けて居られることか、という点である。御自身が頗る健全な身心に恵まれるばかりでなく、幾人もの類稀な岳友を得られて始めてこの様な記録が生み出されたのだと思う。勿論その根本に、望月さんの山への確乎たる心構えがあればこそのことである。いみじくもそれが、本書に端的に語られている。

「年齢を加えると共に私は、常に自分にと

つて未知の山ばかりを、能う限り広い範囲で求めてきた。しかも、できるだけ人に会うことのない山道をとつて……。心の山とは、人によつてはある特定の山の場合もあるう。

しかし私の場合は常に新しい山であり、新しい山道であった。それがある限り、それによつて心のふくらみが与えられる限り、私の山

の遍歴は終わるまい。」(P.134)

次に、「開けきつた」といわれる日本の山にも、探せば斯くも閑寂の山々があるといふことである。目次に見るまばゆい程の山名の中で、私が登頂したのは森吉山位のものだから、正に感嘆の想いで頁を繰つた。学生の頃、なつてゐるのは、読者にまことに親切な配慮

「地図の隅をよく見ろ、そこに案外良い山があるのだ」ということを、先輩に教えられたが、望月さんは恐らくこれを文字通り実行されたのだと思う。

そしてこれも重要なことだが、『折々の山』

には、著者の生活がさりげなく書きこまれて居て、例えば山行がどういう健康状態のときになされたものかが窺えるのも有り難い。この紀行を読んで居ると、本当に望月さんと一緒に歩いている様な錯覚をするときもある位だ。学生時代（昭和十一年十一月）に新雪の富士山に御一緒に登つたのを想起し、当時のアルバムを見たら、屏風尾根に向つて立つ望月さんの写真があつた。このときは今北海道に居る大塚武君も同行され、六合目に三人で幕當したのである。

ところで紀行の文章に含まれる自然描写が、絵の様に美しいと感じる読者は私ひとりではあるまい。それには、絵筆のたしなみもある著者の素養が貢献して居ると思う。又、記録や文献の引用によつて、記述の典拠が明確に、なつてゐるのは、読者にまことに親切な配慮である。これも著者が経済史のゼミナール出身で、学問的な厳しさを身につけて居られるためと思うのは憶測でもないであろう。そして山行が何年のものかを明示してあるので、読者が自分で出かけるときに、状況を判断する際、大層役立つことをも指摘して置きたい。周知の様に、道路事情など情勢の変化はまことに著しい。何年のことを書かれたかが判然としない文章は、如何に「名文」でも山行の

ためには役立たないのである。

思えば望月さんの山行は、一貫していわゆる「避衆登山」である。これは決して贅まがりの登山でも何でもなく、山登りの本流であり、私どもは衆を避けて山と正に自分ひとりで触れ合うのである。半世紀にも及ぶであろう望月さんの山一筋の足跡が、本書に見事に結実したものと言えよう。今後益々の御活躍を祈るや切である。

ひとすぢの踏跡今に辿り来て

心にしみる『折々の山』

ためには役立たないのである。

土方 浩（サブ・リーダー）社3・桐朋高。のある。T・M両君と共にラッセル御三家さすがに東京人、山を含め何事にもセンスの良さをみせつける。交遊も巾広く、日本山岳会学生部の会計担当。

中村宜幸（マネージャー）法3・四日市南高。岩登りの名手。登攀界のニューウェイプの旗手となるためには、寝覚めの悪さを直さねばならない。風貌に似ず純情な男。

田中賢介 商3・東海高。本年より2年間休学して金を貯め、海外へ出ようともくろむ。

寡黙ながら、彼の意志の強固さには誰しも頭がさがる。

萬濃英士 経3・富士高。めがねの奥のクールな眼に皆ふるえあがる。ヒマラヤニストをめざす彼の山登りは一本筋の通つたものがある。

吉田淳一 社2・浦和高。部内随一のロマ

ンティスト。「自然との融合」の山登りを目指すが、顔にはクライマーの精悍さが現われてきた。

稻毛尚之 社1・長田高。新歓コンペで大活躍。酒を飲むと大変する。共装を、志願して多目に持つ頼もしい男。

宮下克彦 社3・長野屋代高。何事にも偏見のない素直な性格は、部内において貴重なものとなつてゐる!! なかなかやらぬが、やる時はやる男。

小林 修（リーダー）社4・広大附属福山高。右翼くずれの根性主義者。山に入ると、時々、根性がどこかへ行つてしまふ。最近は、上手に酒が飲めるようになつたと、もっぱら

谷津範之 商3・足利高。傍若無人とともとの評判。

さすがに東京人、山を含め何事にもセンスのと称されるも、公認会計士をめざし、現在休部中。

竹若敬三 法2・修猷館高。恵まれた肉体に恵まれた頭脳。テントの中で『経済政策論』を読む。おかしな事に酒が全く飲めない。

岡部晃和 法2・桐朋高。2年間もお茶の水S予備高へ通つたせいか、山行ごとにパテ狂つたが、メシをたっぷり食い、最近は尻に肉がついてきた。性格温厚、アクの強さはミジンもない。

一橋山岳部

現役紹介♪♪♪

小林 修（リーダー）社4・広大附属福山

高。右翼くずれの根性主義者。山に入ると、時々、根性がどこかへ行つてしまふ。最近は、上手に酒が飲めるようになつたと、もっぱら

られたないのである。

思えば望月さんの山行は、一貫していわゆる「避衆登山」である。これは決して贅まがりの登山でも何でもなく、山登りの本流であり、私どもは衆を避けて山と正に自分ひとりで触れ合うのである。半世紀にも及ぶであろう望月さんの山一筋の足跡が、本書に見事に結実したものと言えよう。今後益々の御活躍を祈るや切である。

ひとすぢの踏跡今に辿り来て

心にしみる『折々の山』

高。右翼くずれの根性主義者。山に入ると、

時々、根性がどこかへ行つてしまふ。最近は、上手に酒が飲めるようになつたと、もっぱら

られたないのである。

思えば望月さんの山行は、一貫していわゆる「避衆登山」である。これは決して贅まがりの登山でも何でもなく、山登りの本流であり、私どもは衆を避けて山と正に自分ひとりで触れ合うのである。半世紀にも及ぶであろう望月さんの山一筋の足跡が、本書に見事に結実したものと言えよう。今後益々の御活躍を祈るや切である。

ひとすぢの踏跡今に辿り来て

心にしみる『折々の山』

高。右翼くずれの根性主義者。山に入ると、

熱が体内にこもる。内に秘めたる情熱とはこのことか。Fever福田と称す。

石川保典 経1・岡崎高。男前では、現リ

ーダーを抜き、部内一となる。女にたぶらかされて、山を忘れることがなれ。

入佐信宏 法1・鶴丸高。鹿児島弁で朴訥に話す。岩登りのセンスは良いものがある。

Dialect入佐と呼ばれる。

滝浦 剛 経1・神奈川桐蔭高。若干、肥満ぎみで、歩く後姿が象の如くである。称してELEPHANT滝浦。何を考えているかわからぬが、ちゃんと自分のペースはくさらない。

竹内俊雄 経1・開成高。名門校出身らしく理智的な顔つきをしている。残念ながら、内臓疾患のためドクターストップがかかり、現在休養中。早く、実動部隊へ復帰してほしい。

中西 茂 経5・大阪三国丘商。ともすれば、たがのゆるみがちな実動部隊をしめてくれる。今年は女子大との合同コンバに燃えているが、「骨まで愛して」は遠慮されたい。

(文責・小林修)

近藤 泰、米田篤裕、岡部寛史、引地 真、

学生一〇名、以上四四名。

議事

会務報告

I 評議員会

昭和五五年六月一八日(水)、於竹橋会館

出席者・望月達夫、手塚晴雄、宮城恭一、

久保孝一郎、中島 寛、原 博貞、藤本敏

行、加藤博行、近藤 泰、佐藤活朗、引地

真、(学生)土方、中村、以上一三名。

議事・総会にかける議題

II 昭和五年度総会

昭和五五年六月二十五日(水)、於竹橋会館

出席者・吉沢一郎、松木謙三、手塚晴雄、

吉沢松次郎、増山清太郎、望月達夫、佐々

木誠、岩崎利一、宮城恭一、佐野茂雄、山

田亮三、久保孝一郎、高野秀男、鈴木 肇、

桶口 洪、上田駿策、甘利仁朗、南 亮進、

中村幸正、中島 寛、有賀 盈、石 弘光、

倉知 敬、小島和人、小野 肇、原 博貞、

前神直樹、加藤博行、松田重明、佐藤活朗、

ジャーともに承認。

1. 五四年度活動報告 佐藤総務幹事
2. 五四年度決算報告 近藤会計幹事
3. 評議員改選 手塚晴雄さんにかわり佐々木誠さんにお願いすることとなつた。

また、評議員会長は長沢道彦さんにかわり、原 博貞さんが就任した。

4. 幹事改選 代表幹事(中島 寛・留任)、行、加藤博行、近藤 泰、佐藤活朗、引地真、(学生)土方、中村、以上一三名。
5. 監事選出 従来空席であったが、新たに近藤 泰・留任)、山行幹事(藤本敏行・新任)、会報担当(加藤博行・留任)、学生担当(引地 真・新任)。

5. 監事選出 従来空席であったが、新たに甘利仁朗、倉知 敬両氏にお願いすることとなつた。

6. 五五年度行事計画 総務幹事、承認
7. 五五年度予算 会計幹事、承認

8. 一橋山岳部五四年度決算報告、上方マネージャー、同五五年度予算、中村新マネー

以上の議事終了後、多数の新人をむかえた
一橋山岳部の近況、吉沢一郎さん新書出版、
針葉樹会新人紹介（引地、米田、岡部の三
君）、その他近況紹介等で歓談した。

（佐藤活朗）

前神直樹（自）A/C Srita Alicia Doria
Calle, Morena 1353 Dept.3.
Col, Narvarte, Mexico. D.F.

（自）札幌市中央区南一四条西九丁

一橋山岳部の近況、吉沢一郎さん新書出版、

針葉樹会新人紹介（引地、米田、岡部の三
君）、その他近況紹介等で歓談した。

兵藤元史（自）小金井市梶野町三一七一五
TEL ○四一二一八四一一七四四

石油資源開発梶野寮 TEL 一八四

※ 左記の方々の消息（住所・勤務先）を

存知の方は幹事までご一報下さい。

会員消息

高野秀男（勤）日本靴下工業組合連合会

東京都中央区東日本橋一一一七一

四 TEL 一〇三

TEL 八五一—四八四八

丸山則一（自）東京都武藏野市関前四一一

七

（勤）三井物産本店 非鉄金属第一

部 ニッケル室

三井 博（自）沼津市米山町一三一四三

駅北ハイツB棟一〇一号、TEL 一四一

場購買課

TEL ○四五一八一一〇六九〇

（勤）プリヂストンタイヤ（株）横浜工

あつた方、また名簿に誤りを見つけた方はな
るべく詳しく（所属部課、郵便番号なども）

左記幹事までご連絡下さい。

小野 肇（勤）北海道電力（株）立地環境部

札幌市中央区大通東一丁目

勤務先電話 ○三一二一五一三一一

内線四八五

金田一郎（改名）金田吉兵衛

岡垣治雄（勤）三井信託銀行藤沢支店

TEL ○四六六一一六一三一五一

TEL ○六〇一九一

TEL ○一一一五一一一一一

会計報告

会計幹事 近藤 泰

一、昭和五四年度針葉樹会 会計決算
並びに五五年度予算案

まず最初に、前年度より会計幹事の大任を仰せ付けられ、今回始めて決算、予算報告を作成するに当たり、帳簿整理不足、会計処理の不手際等で諸先輩方に多大のご迷惑をおかけしたことをお詫び申しあげます。

さて、決算、予算の件ですが以下に要点、留意点につき解説を致しますので、文末の各表を、ご参考下さるようお願い致します。

まず五四年度の会費収入でありますが、実績は当該年度分会費の理論収入額の約六五パーセントに相当するのですが、実際には過年度分、翌年度分の収納も含まれるので、会員数で表示するならば二百三名中八七名の方々に当該年度までの会費を納入いたしました。会報発行のコストが急上昇している折（因みに前五六号の実質経費は一冊当

り約千六百円）会員諸兄の絶大なるご支援が是非とも望れます。今年度も学生諸君に会費集金の協力をしてもらう事になりましたので、同期で未納の方がおられたら一声かけていただくなとのご協力をお願ひします。

雜収入では前号でもご報告致しましたが、

中西 茂君の父君、喜八郎氏よりのご寄付十萬円が含まれており、これは遭対基金として積立させていただきました。

支出につきましては当年度は会報発行が一回のみということで、会費収入がかなり予算

を下回つたにも係わらず翌期繰越金としてかなりの余剰を生じました。

五五年度予算案に関しては、会費収入を当該理論収入額の九十パーセントと見込みました。

また支出面では山岳部の部員増加、装備価格の上昇を勘案し、補助を五万円アップの二十万円と致しました。

なお遭難対策基金の積上げは、今年度は特に予定しておりません。（五十四年度末残高九十一万三八五三円）しかし会費収入が順調

に推移すれば同基金のより一層の充実も果せる訳であり、この意味でも重ねて早急なる会費納入をお願いいたします。

以上五四年度針葉樹会会計報告並びに五五年度予算案は六月二十五日の総会によつて承認されました。

二、針葉樹会 会費納入者御氏名

（自五五年四月二十日、至八月三一日）

吉沢一郎（四千円）、松木謙三（四千円）、吉沢松次郎（四千円）、望月達夫（四千円）、

鷺崎雄四郎（二万五千円）、宮城恭一（六千円）、佐野茂雄（六千円）、久保孝一郎（六千円）、

山崎拡（一万三千円）、関恒義（一万円）、上田駿策（七千円）、吉田義則（一万二千円）、石和田四郎（二万九千円）、宮川次夫（一万

九千円）、勝田有恒（一万九千円）、甘利仁朗（六千円）、各務謙三（一万九千円）、中

村幸正（七千円）、中村保（二万二千円）、丸山則二（一万二千円）、山田邦行（二万七千円）、峰高教通（一万二千円）、宮城賢三（一万八千円）、中島寛（六千円）、有賀盈

(六千円)、石弘光(六千円)、小島和人(一万二千円)、小野肇(五千円)、山本溢弘(一万六千円)、佐藤久尚(一万六千円)、原博貞(一万円)、岡田健志(一万六千円)、齊藤正(一万六千円)、俵昭(一万円)、井草長雄(一万二千円)、前神直樹(八千円)、兵藤元史(四千円)、加藤博行(四千円)

(敬称略)

△付記▽次回会報では昭和五五年度分までの会費御既納者という形で、リストを作成する予定です。

会員消息（追加）

瀬田 宏（勤）東京新聞編集局特報部

東京都港区港南二一三一十三

〒一〇八

TEL 四七一一二二一一

(自) 東京都世田谷区松原四一二七

一五 〒一五六

TEL 三二二一六〇九一

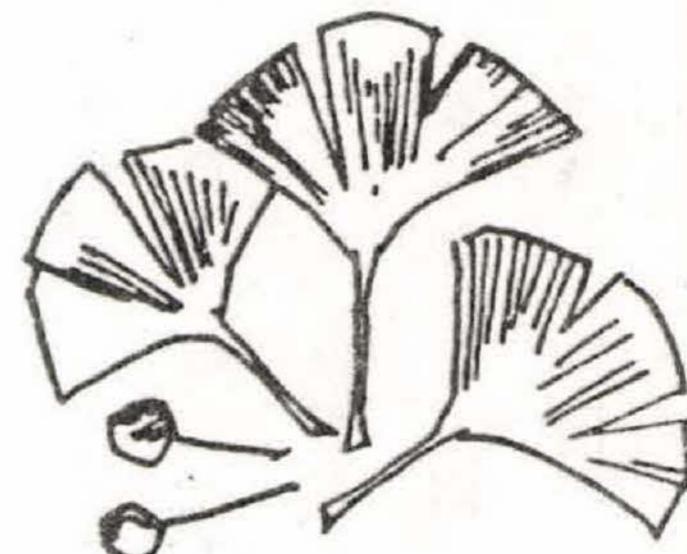
編集後記

記録的な異常低温に終つた今年の夏は、中心に来年一年頃刊行予定です。

学に七月より一年の予定で留学中の前神さんもメキシコの山に登つたとのこと、次号復刊五十八号では、その辺の話題を

会員諸氏の山行も全般的に不調であつたと聞いております。従つて本号では大先輩よりの夏山紀行は珍しいことに全くなくかわつて若手会員の寄稿三本を掲載しました。海外からの便り、新著紹介が何とか間に合つたのは嬉しい限りです。代表幹事の中島さんは、九月から一ヶ月、

長期休暇をとつてカナディアンロッキーに行かれたとのこと、またメキシコの大



(十・六) 加藤博行

I 昭和54年度会計収支決算及び55年度予算表

収 入 の 部	収支項目	昭和54年度	昭和54年度('79.6.1~'80.5.31)			昭和55年度
		決算	決算	予算	差額	予算
前期繰越金	345,018	47,423	47,423	-	204,064	
会費	524,000	(a) 721,000	810,000	89,000	(j) 990,000	
雑収入	143,388	(b) 116,942	5,000	△111,942	41,936	
TOTAL	1,012,406	885,365	862,423	△ 22,942	1,236,000	
支 出 の 部	会報発行費	288,280	(c) 165,240	450,000	284,760	(k) 850,000
	山岳部補助	150,000	150,000	150,000	0	(l) 200,000
	通信費	56,855	(d) 22,700	30,000	7,300	25,000
	印刷費	142,520	(e) 29,880	30,000	120	10,000
	事務費	1,670	(f) 1,290	5,000	3,710	2,000
	雑費	6,210	(g) 1,220	15,000	13,780	1,000
	針葉樹発行費	0	0	0	0	-
	その他経費	33,448	(h) 71,668	30,000	△ 41,668	20,000
	遭難対策基金繰入	286,000	(i) 239,303	100,000	△139,303	100,000
	翌期繰越金	47,423	204,064	52,423	△151,641	28,000
	TOTAL	1,012,406	885,365	862,423	△ 22,942	1,236,000

【収支内訳】

(a) 会費 721,000

51年度分	30,000
52 "	39,000
53 "	210,000
54 "	428,000
55 "	14,000

(c) 会報発行費 165,240

54号印刷費(追加)	6,000
55号印刷費	118,500
会報発送費等	40,740

(e) 印刷費 29,880

コピー代	2,010
総会出欠返信用葉書	12,000
印刷機購入等	8,370
チラシ	7,500

(g) 雜費 1,220

郵便振替手数料	170
送金手数料	1,050

(i) 遭難対策基金繰入 239,303

山岳部学生加入保険料	124,290
遭難基金積上げ分	115,013

(k) 4回の発行を見込む

(b) 雜収入 116,942

寄附金(中西喜八郎氏より)	100,000
利息等	16,942

(d) 通信費 22,700

葉書代(OB山行、忘年会等)	12,700
切手代	10,000

(f) 事務費 1,290

筆ペン、奉賀帳	900
帳簿用紙	390

(h) その他経費 71,668

香典等	10,660
総会等会合費不足分補填	61,008

(j) 90%の回収を見込む

(l) 前年度比5万円の増額

